父親による母親の育児満足感の評定

― 母親の自己評定との比較 ―

大藪　泰[1)]，前田忠彦[2)]

［要約］４ヵ月児と10ヵ月児をもつ父親に対して、母親（妻）の育児満足感を中心とする意識内容の評定をもとめ、母親自身による自己評定の結果と比較した。その結果、父親も母親も、母親の育児満足感と夫婦関係の良さは４ヵ月時より10ヵ月時で低下する一方、母親の育児による仕事阻害感は強くなると見なしていた。母親は、父親の協力度が10ヵ月時に低下すると見なしていたが、父親自身は両月齢間で変化しないと回答した。母親の育児満足感に影響する要因を重回帰分析で検討すると、母親が最も影響力が強いと見なした要因は育児による仕事阻害感であり、父親のそれは夫婦関係の良好さであった。こうした知見から、10ヵ月児の母親の育児満足感を支えるためには、父親が考える以上に家事や育児への協力を必要とすること、また母親が直面する社会的活動と育児との葛藤を父親も共有することの必要性を指摘した。最後に、父親の仕事中心志向と家庭中心志向要因の特徴について論じた。

見出し語：育児満足感、母親の自己評定、父親の他者評定、父親の仕事中心志向、
父親の家庭中心志向、重回帰分析

１．研究の目的

母親の育児満足感を中心とする意識内容に対する父親の認知は、父親の家庭に対する態度や行動に違いを招来し、さらにその違いは母親の養育意識や行動に影響すると推測される。本研究は、父親を対象とした調査の結果から、乳児をもつ母親の育児満足感を中心とした意識構造を父親がどのように見ているか検討し、母親自身の自己評定の結果（大藪・前田,1994ab）との比較を試みようとするものである。

２．研究の対象と方法

先の研究(大藪・前田,1994ab)で対象とされた４ヵ月児と10ヵ月児の母親が調査用紙を提出し

[1)] 早稲田大学文学部　[2)] 統計数理研究所

た際（４ヵ月健診と10ヵ月健診の受診時）に、父親に対する調査を依頼し、父親用調査用紙を配布した。母親と父親の回答時期をずらしたのは、母親と父親の回答が相互に影響し合う条件を少なくするためである。父親用の調査票は、郵送によって回収された。有効回答者は、４ヵ月児群 120名、10ヵ月児群 101名であり（回収率はそれぞれ 59.4％と55.5％）、有効回答した父親の平均年齢は、４ヵ月児の父親が32.0歳、10ヵ月児の父親が 32.6歳であった。

調査票は、９領域47項目から構成された。領域Ⅰ：母親の育児満足感（６項目）、領域Ⅱ：母親の仕事阻害感（５項目）、領域Ⅲ：母親の落ち着き（５項目）、領域Ⅳ：母親の自己評価（５項目）の４領域は、母親用の調査票で用いられたのと同一の領域と質問項目を使用したが、すべての質問項目で、主語が「あなた」から「奥様」に変更された。例えば、母親用の調査票の領域Ⅰの質問項目「あなたは、お子さんを抱くと嬉しく感じますか」は、父親用では「奥様は、お子さんを抱くのを嬉しく感じているでしょうか」に改められた。つまり、母親の自己評定項目から、父親による他者評定のための項目に変更された。領域Ⅴ：乳児の気質（５項目）は、母親用とまったく同じ項目が使用された。領域Ⅵ：父親の家庭観・仕事観（５項目）は、父親用に新たに作成された領域であり、「仕事と家庭の重要度」や「生きがいが仕事であるか」などを尋ねた。領域Ⅶ：父親の育児労働観（５項目）も新たに作成された領域であり、「育児労働の疲労度」や「父親の育児や家事への参加の是非」などを尋ねた。領域ⅧとⅨも母親用の領域と質問項目を使用し、父親用に変更された。例えば、領域Ⅷ：父親の家事・育児への協力度（５項目）では、母親用の「あなたの夫は、お子さんの遊び相手になってくれますか」は、父親用では「あなたは、お子さんの遊び相手になっていますか」に変更された。また、領域Ⅸ：夫婦関係の良好さ（６項目）にある「あなたの夫は、あなたの話しをよく聞いてくれますか」は、「あなたは、奥様の話しをよく聞いていますか」に変更された。

質問項目は、同一領域の項目が連続しないように、並べ替えて配列された。各質問項目とも５段階評価（１－「まったくそうは思わない」～５－「非常にそう思う」）で回答を求めた。

３．結果と考察

(1)質問項目の因子分析と信頼性の検討

47個の質問項目の回答分布を個別に検討し、極端に偏りがないことを確認し、221名全員のデータを用いて因子分析（斜交プロマックス解）を行った。新たに作成した領域Ⅵと領域Ⅶの整合性の高い解を因子数を変えて探索したが、想定どおりの対応関係が見られなかった。因子負荷量 .350以上を基準に、領域と質問項目の関係を見直したところ、「生きがいが仕事である」「育児労働は社会での仕事より楽である」「家事や育児は女性の仕事だから、母親だけがすればよい」といった５項目から構成される因子と、「家庭は何よりも大切な拠り所である」「仕事より家庭のほうが大切である」「家庭で父親としての役割を果たすことに喜びを感じる」といった５項目から構成される因子に分類できた。

そこで、前者を領域Ⅵ：仕事中心志向、後者を領域Ⅶ：家庭中心志向と再定義した。その他の領域は、母親データ（大藪・前田,1994ab）と比較するためにそのまま使用した。各領域について項目得点（ただし逆転項目は［６－項目得点］）を加算して、領域得点を算出した。算出された領域ⅠⅡⅢⅣⅤⅧⅨの領域得点のα信頼性係数は、.572～.763の間にあった（表１）。領域ⅥとⅦのα信頼性係数は、.654と .701であった。

(2)４ヵ月児群と10ヵ月児群の領域得点の比較

４ヵ月児群と10ヵ月児群の各領域得点を比較するために、両群間で平均値の差の検定を行った。その結果、領域Ⅰ：母親の育児満足感では、10ヵ月児群の父親は４ヵ月児群の父親より、母親の育児満足感が低いと見なしていた(t=2.50, df=219,p<.05)。領域Ⅱ：母親の仕事阻害感では、10ヵ月児群の父親は４ヵ月児群の父親より、母親が育児によって社会的な仕事を阻害されているとの思いを強く感じていると評価していた(t=-2.32,df=219,p<.05)。領域Ⅵ：父親の仕事中心志向では、10ヵ月児群の父親は４ヵ月児群の父親より、仕事中心志向の得点が低くなる傾向が見られた(t=1.67,df=219,P<.10)。領域Ⅸ：夫婦関係の良好さでは、10ヵ月児群の父親は４ヵ月児群の父親より、夫婦関係の良好さが低いと評価していた(t=2.09,df=219,p<.05)。その他の領域では、両月齢群の領域得点に有意な差がなかった。

表１は、父親と母親に共通する領域の月齢別得点を、父親と母親別に示したものである。この表から、父親と母親の領域得点の月齢変化は類似する傾向が顕著であることが知られよう。つまり、領域Ⅰ・Ⅱ・Ⅸでは、父親母親ともに両月齢間の領域得点の増減の方向は同じであり、かつその差にはいずれも有意差もしくは有意な傾向が見られている。また、領域Ⅲ・Ⅳ・Ⅴの両月齢間の領域得点では、父親母親ともに差が見られていない。従って、総じて父親は、母親の意識の変化によく気づいているといえよう。父親の仕事中心志向（領域Ⅵ）が４カ月児の父親より10ヵ月児の父親で弱くなったのは、父親が母親のこうした意識の変化を感じ取ったことによる可能性が推測される。

唯一、父親と母親とで異なっていたのは、領域Ⅷ：父親の家事や育児の協力度に対する評価であった。10ヵ月児の母親は４ヵ月児の母親より、父親の協力度が低下すると見なしているが、父親は低下したとは見なしていないのである。

母親の育児満足感（領域Ⅰ）が低下し、母親の仕事阻害感（領域Ⅱ）が強くなる10ヵ月児の母親は、父親が考える以上に父親からの家事や育児への協力を必要とする時期であると思われ、父親の保健指導場面では、そうした母親の状態を父親に伝えることが必要であろう。また、そうすることが、10ヵ月児群に見られる夫婦関係の良好さ（領域Ⅸ）の低下現象を防止することに寄与するものと考えられる。

(3)母親の育児満足感を規定する領域の分析

領域Ⅰ：母親の育児満足感を基準変数、領域Ⅱ～Ⅸを説明変数とする重回帰分析を月齢ごとに行った。８領域の説明変数のうち、偏回帰係

数が統計的に有意なものを影響力の強いものから、母親データとともに図示したのが、図１と図２である。

図１から、４ヵ月児の母親の育児満足感に影響する要因を父親と母親で比較すると、父親と母親が共通して影響すると見なす領域は、乳児の気質、母親の自己評価、夫婦関係の３領域であることが知られる。一方、父親と母親で異なる点は、母親では育児による仕事阻害感が２番目に強い影響力をもつ領域と見なされているのに対し、父親ではこの領域の影響力が評価されていないことである。従って、父親は、母親の育児満足感に影響する要因として、もっぱら母親、乳児、自分と母親との関係といった家庭内の領域しか取り上げないのが特徴であり、社会的活動と育児との葛藤、すなわち家庭外の要因との関係から派生する問題を重視する母親とは違いが認められる。

図２に見られるように、10ヵ月児群になるとこの違いがより顕著になる。母親では、仕事阻害感の影響力が最も強く評価されてくるのに対し、父親は母親にこうした社会的活動と育児との葛藤があること、そしてその葛藤が育児満足感に影響することを相変わらず評価しようとしないのである。

しかし、10ヵ月児の父親が母親の意識の変化にまったく気づいていないわけではない。その理由を一つあげるなら、４ヵ月児群の父親の仕事中心志向と母親の仕事阻害感の間には相関が見られないが、10ヵ月児群ではその間に正の相関が出現していることを指摘できよう（表２）。つまり、10ヵ月時になると、仕事中心志向の父親は、母親の仕事阻害感が強くなることに気づき始めると考えられるのである。

ところが、こうした気づきに対応して生じる父親の変化は、母親の育児満足感に影響する要因として、夫婦関係の良好さを重視する傾向を一層強めることに現れてくる。従って、10ヵ月児の父親は、母親の育児満足感の低下を、自分と母親との個人的な関係性の次元で防止しようと努めている可能性が推測される。

こうしたことから、父親が夫婦関係の良好さを重視している事実を尊重しながら、社会的活動と育児との葛藤に母親が直面しているという事実に対しても、父親が気づいていけるような工夫をすることが必要と考えられる。この時期の夫婦関係をさらに良好なものにするためには、父親が母親のこうした葛藤を共有し、その葛藤の解決に協力することが重要であると思われるからである。

(4)父親の仕事中心志向・家庭中心志向の分析

４ヵ月児群、10ヵ月児群ともに、父親の仕事中心志向と家庭中心志向とは負の相関関係にあり、仕事中心志向が強いほど家庭に対する配慮が弱いといえる。

仕事中心志向は、他の領域と相関関係がなく、非常に独立性が高い領域と思われる。唯一の例外が、10ヵ月児群で見られる母親の仕事阻害感との相関である。先述したように、10ヵ月児の仕事中心志向の父親は、母親の仕事阻害感の強さに気づき始めたことが推測されよう。家庭を省みようとしない父親を夫にもつ母親は、より仕事阻害感を強く意識するようになるのかもし

れない。

他方、父親の家庭中心志向は両月齢群ともに、他の領域と多くの相関関係にある。最初に、母親の仕事阻害感との関係を見ると、４ヵ月児群では負の相関を示している。つまり、家庭中心志向の父親は、母親の仕事阻害感が少ないと見なしたのである。ところが10ヵ月児群になると、相関関係がなくなっている。この相関係数の変化は、家庭中心志向の父親も仕事中心志向の父親と同様に、母親の仕事阻害感が高くなっていることに気づいたことを示唆するものと思われる。しかし、家庭中心志向の父親と仕事中心志向の父親とを比較すると、前者は負の相関から相関が無い状態への変化であり、後者は相関が無い状態から正の相関への変化である。従って、家庭中心志向の父親は、仕事中心志向の父親と比べると、４ヵ月児群でも10ヵ月児群でも母親の仕事阻害感を低く評価する傾向が示唆される。

家庭中心志向の父親のその他の特徴を見ると、乳児を育てやすい気質の持ち主と評価していること、自分の家事や育児への協力度と夫婦関係の良さを高く評定すること、そしてそれらが10ヵ月児群で一層強まる傾向にあることである。家庭中心主義の父親がそのように評価する理由を推測すれば、生後４カ月から10ヵ月までの半年間のうちに、父親としての役割を果たしてきたという自信が、自分と母親との関係性を良く評価させた可能性が推測される。また、そうした自信が、母親の育児による仕事阻害感を低く評価させる一因として働いているのかもしれない。

ただし、こうした結果は、仕事中心志向と家庭中心志向の父親をもつ母親が、父親の評定と同様な評定をすることを保証するものではない。このことを確認するためには、父親と夫婦関係にある母親のデータを用いて、その対応関係を検討することが必要である。今後に残された検討課題である。

文献

大藪　泰・前田　忠彦　母親の育児満足感に影響する父親要因などの分析　厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」（日暮　眞主任研究者）平成５年度研究報告書,135-140,1994a

大藪　泰・前田　忠彦　乳児をもつ母親の育児満足感の形成要因Ⅰ－４ヵ月児と10ヵ月児の母親の比較－　小児保健研究,53,6,826-834,1994b

表１ 領域得点のα信頼性係数と月齢群の平均値の差の検定(上段：父親 下段：母親)

領域	質問内容	α係数[1]	４ヵ月児群[2] 平均値(ＳＤ)	10ヵ月児群[3] 平均値(ＳＤ)	t検定
領域Ⅰ	母親の育児満足感	.684	23.5(2.61)	22.6(2.74)	*
		.760	23.3(2.88)	22.5(3.13)	**
領域Ⅱ	母親の仕事阻害感	.654	11.2(2.96)	12.1(2.73)	*
		.722	11.4(3.32)	12.0(3.28)	+
領域Ⅲ	母親の落ち着き	.763	16.4(3.19)	16.3(3.26)	
		.693	15.1(2.77)	14.6(2.92)	
領域Ⅳ	母親の自己評価	.572	17.4(2.30)	17.3(2.41)	
		.693	15.8(2.85)	15.4(2.88)	
領域Ⅴ	乳児の気質	.729	19.6(2.78)	19.4(2.64)	
		.736	20.5(2.78)	19.9(2.81)	
領域Ⅷ	父親の協力度	.751	19.0(2.77)	18.9(2.79)	
		.844	19.8(3.81)	18.8(4.02)	*
領域Ⅸ	夫婦関係の良好さ	.757	22.1(2.86)	21.2(3.22)	*
		.830	23.7(3.56)	22.3(4.31)	***

Note. [1] α係数は全体のデータに基づいて算出された(父親：N=221 母親：N=384)
[2] ４ヶ月児群 父親：N=120 母親：N=202
[3] 10ヶ月児群 父親：N=101 母親：N=182
+ p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

表２ 父親の仕事中心志向・家庭中心志向とその他の領域との相関係数（月齢別）

領域	質問内容	４ヵ月児群 仕事中心志向	４ヵ月児群 家庭中心志向	10ヵ月児群 仕事中心志向	10ヵ月児群 家庭中心志向
領域Ⅰ	母親の育児満足感		.370***		.326***
領域Ⅱ	母親の仕事阻害感		-.266**	.224*	
領域Ⅲ	母親の落ち着き				
領域Ⅳ	母親の自己評価		.266**		
領域Ⅴ	乳児の気質		.409***		.370***
領域Ⅵ	父親の仕事中心志向	—	-.291**	—	-.257**
領域Ⅶ	父親の家庭中心志向	-.291**	—	-.257**	—
領域Ⅷ	父親の協力度		.317***		.401***
領域Ⅸ	夫婦関係の良好さ		.403***		.554***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

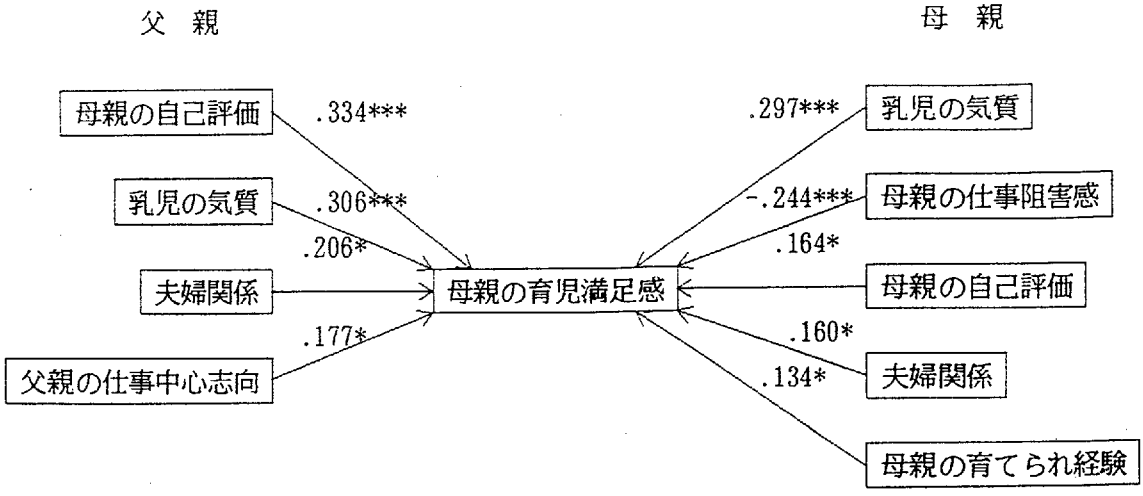

図１　４カ月児をもつ母親の育児満足感に影響する要因
(注)数字は統計的に有意な偏回帰係数
* p<.05　** p<.01　*** p<.001

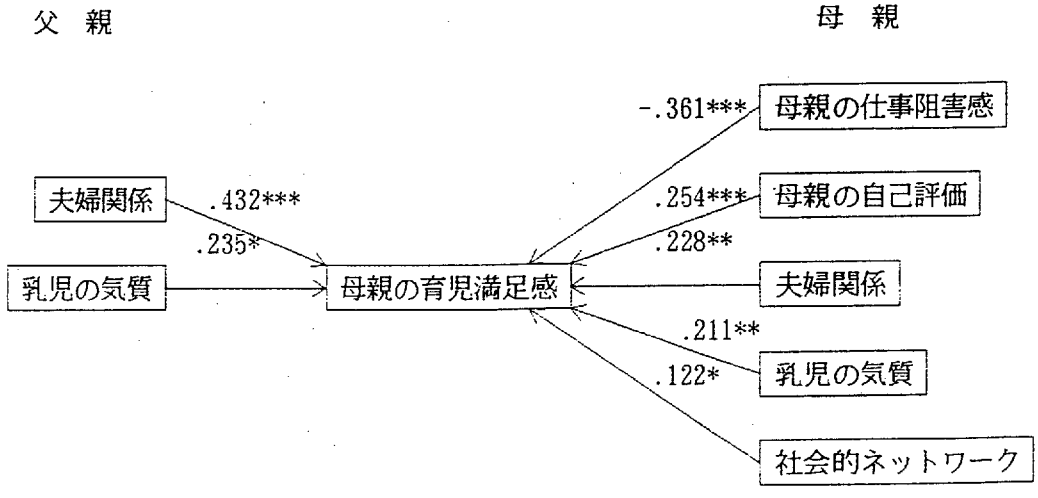

図２　10カ月児をもつ母親の育児満足感に影響する要因
(注)数字は統計的に有意な偏回帰係数
* p<.05　** p<.01　*** p<.001

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

[要約]4 ヵ月児と 10 ヵ月児をもつ父親に対して、母親(妻)の育児満足感を中心とする意識内容の評定をもとめ、母親自身による自己評定の結果と比較した。その結果、父親も母親も、母親の育児満足感と夫婦関係の良さは 4 ヵ月時より 10 ヵ月時で低下する一方、母親の育児による仕事障害感は強くなると見なしていた。母親は、父親の協力度が 10 ヵ月時に低下すると見なしていたが、父親自身は両月齢間で変化しないと回答した。母親の育児満足感に影響する要因を重回帰分析で検討すると、母親が最も影響力が強いと見なした要因は育児による仕事阻害感であり、父親のそれは夫婦関係の良好さであった。こうした知見から、10 ヵ月児の母親の育児満足感を支えるためには、父親が考える以上に家事や育児への協力を必要とすること、また母親が直面する社会的活動と育児との葛藤を父親も共有することの必要性を指摘した。最後に、父親の仕事中心志向と家庭中心志向要因の特徴について論じた。